

平成26年(2014年)3月27日(木曜日)

## シリーズ「肺がん」②

### 肺がんと画像診断と放射線治療

国立病院機構和歌山病院

診療放射線技師 夏目久司

肺がんは、血痰や咳嗽（がいそう）などの症状により見つかる場合と症状はないが検診で異常を指摘され、精査の結果見つかる場合の大きく2つに分かれます。肺がんの診断は、胸部X線検査、胸部CT検査、内視鏡（気管支鏡）検査、喀痰検査を主とします。早期肺がん手術後の5年生存率は7割程度ありますが、1cm以下のがんは発見することが難く、2cmを超えるがんが見つかった時は約2～3割に転移があると言われ、予後は良くありません。よって、最も重要なことは他のがんと同じで早期発見、早期治療です。現在、一般的に広く行われている胸部X線検査だけでは、骨・心臓・血管等の臓器に重なる病変を発見するのが困難ですが、胸部CT検査を併用することによって、胸部X線検査で発見が難しい1cm以下の小さな陰影や淡い陰影の肺がんを発見することがあります。分割1回分の照射

いる肺がんも発見し易くなります。これらの検査を行って最終的な検査は病理検査（細胞診断、組織診断）ということになります。

がんの治療には、手術による外科療法、薬剤を用いてがん細胞を攻撃する化学療法、患者に放射線を照射し直接治療する放療線療法の3種類がありますが、がん治療の本柱と言えています。3種類ともに単独で行う場合もありますが、それぞれの療法を組み合わせて行う治療が積極的に行われています。

今回は放射線治療についてお話しします。

放射線療法とは、がん細胞に放射線を集中的に照射し治療を目指します。しかし正常細胞にも放射線が当たるため分割照射を行います。正常細胞とがん細胞では、放射線によるダメージの回復力に差があり、数回から数回に分割して照射することで、正常細胞にくるまで無症状のことが多く早期発見し難いことがあります。早期発見が治療の際に重要なため、年に1回は肺がん検診を受けてみてはいかがでしょうか。

では目に見える効果はほとんどありませんが、それらが集積されてがんの縮小、消失といった結果となります。がんを治療すると共に、副作用を十分許容できる限度に抑え、将来にわたって機能形態を温存できる様になります。これらの検査を行って最終的な検査は病理検査（細胞診断、組織診断）ということになります。

治療は特に大きな効果が期待できます。手術をして病巣を摘出するのと変わりないほどの効果を発揮できる場合もあります。そして、身体への負担が少ないので高齢で手術に耐えられない方や合併症、あるいは切除が困難な場所に腫瘍があつて手術が受けられない方でも治療を行うことがあります。毎回、同じ場所に精密照射するため特にマスクや装具を使うこともあります。

最後になりましたが、ともあります、一回の照射時間は1～2分間で、痛みや熱さといった感覚はなく治療を終えることができます。

最後になりましたが、肺がんは腫瘍が大きくなりますが、早期発見し難いことがあります。早期発見が治療の際に重要なため、年に1回は肺がん検診を受けてみてはいかがでしょうか。